

夜明けとともに

石井花月

朝日が昇る前の空を、ただ眺めていた。

紫と薄い青が入り交じるような幻想的な空。白み始めたばかりのそれは、まるで、彼——アルフレッドの心情を表すかのような曖昧な色合いをしていた。

ここは丘の上。トレードマークである赤いマントをはためかせ、空の向こうから吹き付ける風に目を閉じる。頬を優しく撫でていくそれに、少しくすんだ金の髪が揺れた。

どこか緊張したようなアルフレッドだったが、不意にその表情を強張らせ、視線だけを背後に向ける。

「……何をしに来た？」

「ふは、そう固くなるな」

そこに現れたのは、黒髪を腰まで伸ばし、奇妙な文様の刻まれた角を持つ少女・ヨミだった。

少女に見えてその実幾年と生きている彼女は、外見に似合わぬ妖艶な笑みを浮かべ、アルフレッドへ歩み寄る。

「そなたの顔を見に来ただけだ」

「あと数刻もすれば、嫌でも見られるだろ」

怪訝な顔をしたアルフレッドに、ヨミはくつくつと喉奥で笑ってみせた。口元は手にした扇で隠されてしまっているが、きつとひどく楽しそうな表情をしているのだろう、とアルフレッドは思う。

「そなたは相変わらず、オトメ心というものがわからんようだな」

「わかったところでどうしろと？」

「……あの娘も難儀なことだ」

肩をすくめ、ヨミはアルフレッドの隣に立つ。彼の見ていた空を見やり、それからアルフレッドを見上げる。

その視線はとて柔らかいもので、敵意などはまるで感じられない。

「なあ、アルフレッドよ」

「なんだ」

「そなたは怖くはないのか？」

ヨミは続ける。

「私が言うのもなんだが。ディグラストは強い男だ。強く冷酷な、冥王と呼ばれるに相応しい……そんな男を相手にして、怖くはないのか？」

彼女の発言を聞き届けたアルフレッドは、ひとつ息をついて答えた。

「……怖くないわけじゃない」

ヨミはアルフレッドをじっと見据えた。たとえ虚勢でも怖くはないというものと思っていたのだろう。彼女の目には微かな驚きが混じっていた。

「なら——」

「だけどやらなきやいけない」

強い意志のこもった声。

アルフレッドはまっすぐ、朝焼けと同じ色をしたヨミの瞳を見つめる。

「今の俺にとつて、立ち向かうより、逃げることの方が難しい。だってそうだろ、信じてついてきてくれた皆に、背中以外は見せられない」

「……だから立ち向かうのだ、と？」

「そうだ。それが信じてくれた、支えてくれた皆への恩返しになるとも思っているから」

眼下には、アルフレッドの取りまとめる同盟軍のキャンプがある。そこには彼を信じ、慕い、ここまで共に戦ってくれた仲間たちがいるのだ。

彼らの思いや信頼を裏切るわけにはいかない、と語るアルフレッドに、ヨミはどこか懐かしそうに目を細めた。

「……変わらんなあ」

「長らく——そなたが冥王へ立ち向かうようになった頃から見ていたが。私がそなたに興味を抱いたときから、そなたは、ちっとも変らん」

「……？ 何の話だ？」

「こちらの話だ。気にするな」

ひらりと手を振って、ヨミは踵を返す。豪華な衣装がはためいて、アルフレッドもそれにつられるように彼女を振り返った。

「気が済んだ。私はそろそろ戻る」

「……………」

「次に相見えるときは、敵同士。容赦はせんぞ」

「……それはこちらの台詞だ」

「ふ、その意気だ。……ではな」

相変わらず口元を隠したままそう言うと、ヨミはどろりと滲みだした闇に溶けるようにして姿を消した。その闇が消えた後には、花や果実とは違う甘い香りが漂う。

アルフレッドがその香りを払うようにかぶりを振ると、「あ」と可愛らしい声がふもとの方から聞こえてきた。

「アルフレッド！ こんなところにいたんだ」

「サラ？」

青いスカートをひらめかせ、駆け寄ってきたのは幼馴染であるサラという少女だった。彼女は風で髪が乱れぬよう手で押さえながら、アルフレッドのすぐそばまでやってきた。

「ずいぶん早起きしたんだね。いつもは全然起きないのに」

「……いつもって、それ、いつの話だよ」

最近はやんと起きてる、と抗議すれば、サラは少し考えた後に、照れくさそうに笑う。

「そういえばそうだったね。どうにも昔の印象が強くて」

えへへ、と恥ずかしそうにしているサラに、アルフレッドもそれ以上何かを言うつもりは

なかった。

彼女とは物心ついた時から一緒に、故郷の村にいた頃は、寝起きの良くないアルフレッドはサラによく起こしてもらっていたものだ。

女神フレイアに導かれることとなったアルフレッドに、最初についてきてくれたのもサラで。思えば、彼女はいつでもアルフレッドを傍で支え続けてくれていた。

「でも、そうだよ。アルフレッドはもう立派な勇者だもんなあ。わたしが起こさなくても、平気だよ。」

どこかさみしそうに言うサラに、アルフレッドはなんとなくむず痒いような気持ちになる。

「別に、冥王を倒したわけじゃないし……勇者なんて呼ばれるには、まだ早すぎる」

「そう？ わたしにとつてはもう——ううん、ずっと前から。あなたは勇者みたいなものだよ」

ふわりと花が開くように笑って、サラが空の向こうへ視線を向けた。

「だからわたしは、ここまであなたについてきたんだよ、アルフレッド。夢を追いかけるあなたがかつこよくて、そんなあなたの傍でその夢を応援するのが、わたしの夢だったから」

「……サラ……」

「えと、……あ、見て。朝日が」

「……本当だ」

「ずいぶんとヨミと話しこんでいたのか、まだ昇ってきていなかった太陽が地平から顔をのぞかせていた。

サラは太陽を見て、それからアルフレッドへ向かって眩しそうに笑う。それには憧れと、アルフレッドにはわからない何か別の感情が混じっていた。

「じゃあ、そろそろ出発だね」

「そうだな。……もうすぐ、決戦だ」

「……、……あの」

アルフレッドがキャンプに戻るため丘を下ろうとすると、その背中にサラが小さく声をかけた。

「どうした？」

振り返ると、彼女はその場にとどまったままだった。逆光になり表情はよく見えないが、何か言いたげだというのは長年の付き合いでわかる。

アルフレッドが体をこちらに向けたのを見てか、サラは言葉を紡ぐ。

「絶対、……絶対、勝とう、ね」

「……ああ」

「私も頑張るから、勝って、一緒に帰ろうね」

「もちろん。約束だ」

「…………うんっ」

サラは頷いて、アルフレッドの隣まで駆ける。

向かうは決戦の地、冥王の牙城。同盟軍のキャンプはすでに活気に満ちており、仲間たちの賑やかな声がアルフレッドとサラの耳にも届く。

「——さあ、行こう」

彼らの往く道を照らすように、朝日がきらきらと輝いていた。

※当作品は「Lord of Knights」短編小説募集企画に応募いただき『最優秀賞』を受賞した作品です。